

国語テストを通して育む「自分らしさ」

埼玉県日高市立武蔵台小学校教諭 佐藤 篤夫

1. 自律

私は6年生のクラスを受け持っていますが、「自律」は、本学級の学級目標のひとつです。自分自身をみつめ、セルフコントロールし、何事にも自主的に取り組む児童になることを目指しています。私は、この自主性を育むために最も大切な教科は「国語」だと考えます。

国語は、全教科に通じる教科です。特にそれを感じるのには、理科でレポートを書いたり、算数で小黒板を使って発表したりする際に、国語の力（論述する力）が不足していて、わかってはいるのに伝えられない、そんな子どもたちを見る時です。今回の学習指導要領改訂により、さらに「レポートの作成」や「論述」が重要になるようですが、私も学習の様々な場面で自分の考えを自分の言葉で述べることをできる子どもを育てていきたいと考えます。

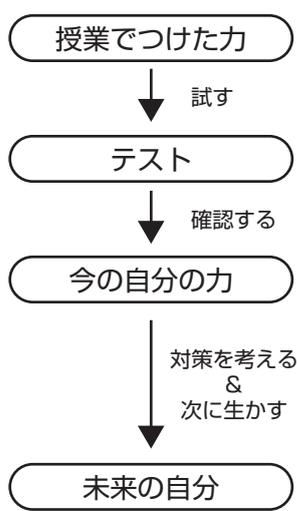
2. 答えはひとつじゃない！

国語は、学習における様々な場面で答えがひとつではないことが大きな特性だと考えられます。これは、学級経営にも重要な役割を果たします。「どんな答えも正解！みんな違う考えを持って当たり前だから」という場面では、子どもは自分らしさを存分に発揮します（みんなの前で言える子と、ノートに書くだけの子には分かれませんが）。国語の授業ではこういう場面が多く、これがひとりひとりの個性を大切に作る雰囲気を作っていきます。さらに、自分らしさを出したことをほめられると、その子には自己肯定感が生まれま

す。それが「自律」という学級の目標に向け、大きな力になると考えます。

3. テストだって、個性を出す場

左の図は、いつも私が授業やテストやその後のフォローをする際に念頭に置いているイメージです。



以下では、高学年の子どもたちを指導するにあたって私が気をつけていることを、一連の流れにそって書き出してみました。

① テストのための授業はしない

テストはあくまでも、授業でつけた力を試す場として考えています。テストを一読し、それを意識して教材研究や授業に臨むのではなく、その単元でつづけるべき力をつけさせることに集中する。それが結果的に単なる暗記力テストではない、意味のあるテストにつながると思っています。

② テストの点がよければいい、悪ければダメ、ではない

「もし間違えたとしても、それをきっかけにして理解できればいいんだよ」「100点なら

完べきでそれ以上ない、ではないんだよ」以上の2点を、テストを実施する際や返す際によく話しておきます。点数に一喜一憂し過ぎず（多少は気にしてほしい場合もあります）、学習内容の理解に重きをおきたいと考えています。

③ 解答に責任を持たせる

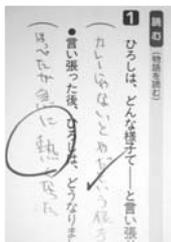
テストを実施する時、問題に対して自分の考えを持って答えているかどうかが一番重要であると私は考えます。そうでなければ、間違っても真剣に答え合わせをしようと思わず、ただ正答を赤で書き直すだけになります。ちゃんと考えを持って答えたのであれば、悔しい気持ちもわいてくるでしょうし、どうして間違えたのかを知りたい気持ちも出てくると思います。少し心配な間違い方をしている子は、個別に呼び、「どうしてこの答えにしたのかな?」「もしかしたらこう思った?」と聞くようにしています。

④ 解答に対するアプローチの仕方考えさせる

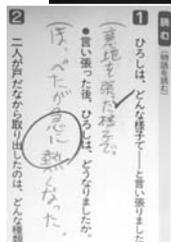
返ってきたテストに誤答があったら、まずは模範解答と自分の誤答をよく見比べさせます。そして、どこが違うのかをよく考えさせます。それがしつかりできると、次回からだんだんと正解に近づいていくように思います。時間があれば、「なぜ間違えたのか」「次にはどんなことに気をつけるか」を考えさせ、書かせて提出させるとおもしろいです。子どもたちにとってテストはやはり特別なもので、

日々の授業で使う教材や教具。隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？
このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

▼誤答を黒板に書きだし、なぜそういう解答になったのかを、クラス全員で考えます。



▲誤答2



▲誤答1

自分の誤答にはショックを受ける場合が多いので、真剣に分析し、善後策を考え、自分の言葉で書いて持つてきます。少しいが外れていたら指導を入れます。

⑤ 間違いは全員で考える

クラスの思考を高めるために、これは取り上げるべきだと思った誤答（特によいのは、自分なりの考えを持って答えている誤答）を教師が選び、なぜそういう解答になったのかを全員で考えさせます。答え合わせのときに、100点をとった子にも知的空白を与えないようにすること、間違った子に、一生懸命考えた結果であれば誤答は悪いことではないという意識を持たせることがねらいです。

4. 教師と児童のテストへの思い

今回、原稿を書くにあたって、子どもたちは国語テストについてどう思っているのだろう、という疑問が真っ先に浮かびました。そこで、子どもたちにアンケートをとってみると、予想以上にテストへの思い入れや関心がありました。これらの回答をもとに、子どもたちひとりひとりがテストをどうとらえているかを把握し、その子に応じた指導に役立てていかなければいけないと思います。

「国語のテストについてどう思うか」という問いには、27名中16名が「好き」、または「まあまあ好き」という回答でした。回答は成績上位の子どもが多く、その理由は「国語が好きだから」、「実力が試せるから」といったものでした。一方、嫌いな理由として気になったのは、「読んで考えるのが面倒くさいから」、「読み書きするのがいやだから」、「文章を読みとるのが苦手だから」といった答えでした。今、PISA型読解力が話題となっていますが、本学級でも「読んで考える力」を高めていかなければいけないと考えます。

今年度は、新学社の国語と理科の『^{アルファ}αテスト』を選びました。「考える力」がみられるというキヤッチフレーズに期待しています。

「テストによって、どんな力がつくと思うか」という問いの回答は、「思考力・考える力」(8名)、「読解力・読む力」(7名)、「書く力・説明する力」(5名)などでした。もちろん単元によってねらいが違ってくるので一概には言えませんが、子どもたちなりに、テストは

こういう力をつけるための場なんだという意識を持つていることがわかります。テストをする時には、教師と子どもが「なんのためにテストをするのか」「どんな力を試すのか」ということを共通理解して臨みたいものです。

「テストが配られたときの気持ちはどうか」という問いには、「やる気をもって臨む」という積極的な回答が14名、それに対し、「仕方ないからやる」という消極的な回答が13名いました。授業をよいものにして、ひとりでも多くの子どもに自分が力がついたと実感させ、「よしやるぞ!」という気持ちでテストに臨ませたいと願っています。

5. 授業への向上心

「向上心」は昔から大好きな言葉ですが、授業で勝負できる教師になるために、国語を軸に指導力を向上させていきたいと考えています。そのために、今回取り上げた教材の活用の仕方を含め、まだまだ勉強をしなければならぬことがたくさんあります。

今回、『OF』への掲載という機会をいただき、自分なりの考え、活用法をまとめてみましたが、何分若輩者ですので、未熟な部分が多々あると思われれます。お読みいただいた先生方にはご指導、ご鞭撻の程宜しくお願ひ申し上げます。